

神様を忘れずに

先週は花の日・こどもの日でした。教会に子どもたちが与えられていることを神様に感謝すると共に、大人も含めて皆が神様に愛された子どもであることを確認した一日だったと思います。お話の中では、「神の子ってどんな子？」ということを考えました。そして、それは自分が神様から愛されていることを知っている人、そして神様がそうしてくださったように自分の方から、つまり相手が愛してくれるのを待つのではなく、自分の方から愛していく人なんだというお話をしたと思います。でも、あれから色々と考えまして、「それだけではないな」と思いました。「神の子」というのは、どんな時も神様と一緒に生きている人のことをも意味していると思います。どんな時もです。苦しい時は神様により頼み、嬉しい時は神様に感謝し、いつも神様を忘れることなく生きている人のことでもあります。でも、私たちはいつも神様を忘れることなく生きているのでしょうか。今日はそんなお話をしていきたいと思います。

先ほどお読みいただきました聖書箇所は、申命記8：11～18です。そこには「神様を忘れてはいけないよ」という注意が記されていました。よく「困った時の神頼み」と言うけれども、私たちはしんどい時とか辛い時とか苦しい時とか、そういう助けてほしい時は「神様、お願い！」と一生懸命神様にお祈りしておすがりします。けれども、そういう苦しい時が過ぎて、自分の生活が幸せに満たされたなら、そのことを神様に感謝するどころか、途端に神様のことを忘れてしまって神様の御心から離れた生活をしてしまうのが私たちではないのでしょうか。

そこで今日の聖書箇所では、あなたの生活が満たされた時に、この幸せは自分の力で掴んだんだと思いがあって、「あなたの神、主を忘れることのないようにしなさい」という注意が与えられています。神様はあなたを幸せにするために、大変な時をいつも守り、導き、寄り添って支えてくださったんですよ。それなのにいざ自分たちが幸せになったら、そのことをすっかり忘れて神様から離れて行ってしまふことのないようにしなさい。そう言われています。

今回、聖書のこの箇所を読みまして、私は新約聖書の別のお話を思い出しました。ルカによる福音書17:11～19です。これは、イエス様がある村に入られた時のお話に他なりません。重い皮膚病を患っている人が十人いて、一生懸命「イエス様、私たちを癒して」とお願いしました。イエス様はそのお願いを聞いて十人の人全員を癒されたのですが、イエス様に感謝しに戻って来た人はたった一人しかいなかったのです。

こうしたお話は、私たちの姿を映し出しています。私たちの信仰は「ご都合主義」って分かるかな？恵みが欲しい時だけ「神様、神様」と呼び求めて、いざ自分が満たされたら神様のことなんか忘れてしまっている、そして神様の御心なんか考えないで生活の中で愛のないことをやりたい放題している、あるいは神様を呼び求めても満たされなかったなら、途端に神様に不平不満をぶちまけて神様に背を向けてしまう、そんなところがあるように思うのです。

大変な時は神様に支えていただき、満たされたならばまず感謝。幸せな日々、また何のトラブルもない当たり前の日々にこそ神様を覚えて、神様に感謝を捧げましょう。今私は当たり前と言いましたが、当たり前というのは決して当たり前ではないんですね。病気をしたら、普段の健康がどれだけありがたいものだったかがよく分かります。いつだったか、思いがけず鉄道会社で働いている駅員さんとお話しする機会がありまして、自分たちにとっては何の変哲もない当たり前の日常が何よりも尊いのだと仰っておられました。何かあっては困るのだ。だから、何の変化もないいつもの当たり前の日常通りに一日が終わった時に「ありがたい」と感じるのだそうです。

私たちも助けてほしい時だけに神様を覚えるのではなくて、当たり前の日々、また満たされている日々にこそ、それが決して当たり前ではないということを知って、神様に感謝を捧げましょう。いつも神様を忘れずに、神様と一緒に御心に沿って歩いていきたいと願います。

祈りましょう。 ——以下、祈祷——